

統・經濟理論の歴史性とその政策的背景

白 石 四 郎

(一)

此の「政経論叢」に「經濟理論の歴史性とその政策的背景」と題して三回に亘ってW・スタークの經濟学史の所説を中心に、經濟学史に現われた各學說の歴史的特質と政策的含意を論じて来たのであるが、二十四卷一・二号に於いては編集上の都合により内容を極度に圧縮する必要を生じ、スタークの所説の紹介のみに終るといふ方式をとつたのである。従つて、古典學派、歴史學派、及び新古典學派の三つを解説なしに、スタークの解釈を述べたので、此の論文の標題にある「政策的背景」については全然論及出来なかつた。此の間に一カ年以上も経過したので、此處に統論として前回迄に論じ得なかつた處を述べて結末をつけるつもりである。

本稿に於いて主として論じたいのは、經濟理論の政策的背景である。但し、論述の前提として前回に述べた處に対する若干の説明を附加する。

スタークの所説の目的は經濟理論の歴史的解釈である。その經濟史の動向に相應せる個々の解釈の明晰性には最大の敬意を表するものである。前稿にも述べた様に、歴史性とは現実性の意味でもある。従つて、此の現実性を裏返しにすれば

当然に政策性が出て来るのであると筆者は考えるのである。勿論、問題はもっと複雑である事は云うまでもない。然し、此の様な歴史的解釈から政策的背景をとり出して論じようとする意図は、経済学の実践性を強調しようとするものである。近代経済学と云われる最近支配的な純粹経済学が物理学の成果を大いに取入れ益々精密化する方向にあるが、筆者は経済学が如何に自然科学に近い処にある文化科学であるにせよ、自然科学的方式のみを以ては、現実の経済を理解するに妥当を欠く点を含むものと考えるのである。即ち、社会科学には社会科学的態度の限度があると考えるのである。例えば、今日の物理学に於いては質的なものを量的に表現することが可能である。表現すると云う形容が不適當ならば、還元すると云つても宜しい。元素が持つている電子量の相違で各元素を表現する。斯うなると酸素と水素の相違は質的なものではなく量的なものである。男性と女性の相違も染色体の量的な相違であつて、質的な相違でなく表現し得ることになる。社会科学に於いては、此の様な分析方法をとつて推し進めると觀念の遊技に陥る危険性をもつであらう。そして、経済学に於いてもその様な傾向が認め得られるのである。例えば、貨幣的表現で人間の厚生關係全般を論じたり、生産要素(註1)（の中の労働）を全世界的に常に質的には同じであると考える量的にのみ取扱つて見たりするのである。(註2)従つて、社会科学には社会科学的態度がとらるべきであつて、それには一定の制約が存在すると云うのが筆者の考える処である。ではその様な態度、方法は何なるものであるかと問われれば、充分な答えは出来ないが、併し、社会科学の性格として現実妥当性乃至はヴィオ一の云う適合性(註3)が必要であると考えるのである。スタークの考えに従つて、経済学が人間に対する研究である限り人間の変化、社会の変化に相應して、その内容を変化すべきである、とするならば、歴史に超越した社会科学は存在することは出来ないのである。その限りでは問題適合性が社会科学の絶対必要条件とならう。その社会に於いて問題となるもの、経

経済学で云うならばおのづから科学的経済学の対象となるものが、その経済社会の特質である。此の特質に相応して経済学の内容も規定さるべきなのである。余談的に云うならば、最近に生じた、ポーランドやハンガリーに於ける動乱はソヴェートの社会主義方式に相当の修正を余儀なくせしめている。之がマルクス経済学の分野にも反映して、単なる公式論の反省を強要しており、例えば、資本主義社会における労働階級の相対的のみならず絶対的な窮乏化の問題とか、資本主義経済、特にアメリカに於ける恐慌又は不況の急速なる発生と云う問題などに関しては、今まで強固に主張して来た人々の間にも修正が見られている。^(註4)

マルクス経済学の歴史的基盤を考えればそれは当然であつて、マルクスの対象として見られた資本主義社会と今日の資本主義社会とは既に相当の相違があり、労働階級の地位そのものが違っている。我々はあくまで問題適合性を考えなくてはならないであろう。論述の順序として、スタークについての解釈をもう少し加えねばなるまい。そして、私の結論にもつて行ふと考える。スタークの所論を紹介して論じて来た理由は、此の歴史的解釈からする政策的な含意を抽出することが出来るからであり、それによって経済学の問題適合性と政策的性を持ち出そうとすることなのである。尚スタークの所説の処でなした引用等はその儘使用しているので、特に本稿では出所を記さない。従つて、前稿を参照せられたい。

(註1) 此の点について J. Viner が近代経済学者の悪癖と見るべきものの例として持出している。J. Viner: *International Trade and Economic Development*, 1952. pp. 27-29.

(註2) ビグーの厚生経済学に於ける考え方を参照されたい。

(註3) J. Viner, *ibid.* pp. 1-14. esp. p. 14. ヴィナーは適合性を政策的性と云う様には解していないし、私も適合性を直ちに政策的性と同一視するものではない。但し、ヴィナーで理論構成上に適合性を云う場合、古典派の現実即応性を考えているのであるから、窮局的に経済学の政策的構造に關係するのである。

(註4) 此の点で、最近、大阪市立大の名和統一教授の実に良心的にして、立派な報告を拜聴した。アジア政経学会、第七回大会、三十一年十一月、於、同志社大学「世界史の新段階に於ける資本主義と社会主義」。此の報告はやがて同会の会報に収録されるであらう。

(11)

スタークの経済学史に於ける歴史性と云う方式に二つの型があった。一つは大きく全体的に各学派の発生した時代に於ける問題としての政策性である。他は個々の学説に於ける理論的限定性についての解釈である。前者について云うならば、重商学派、重農学派、歴史学派の系列でいずれも生産力の発達と云う点が資本主義との関連に於いて論ぜられたのである。後者については、例えば、スミスの労働価値説が何故にとられたかの説明に見られた様な理論構成上の歴史的解釈である。古典派に景気変動論がなくてもそれは極く当然で、少くとも、スミスの時代には今日の意味の景気変動は存在しなかったのである。

ただ、新古典派については政策性の問題にはふれていない。之は新古典派の非政策的態度を一応是認すれば当然であるが、併し、その発生せる時代についての彼の説明は此の問題についての重要な暗示をなしていると考えられる。又、新古典派が既に過去のものとして回顧出来る段階に達していないので、前の様に断定的な立場をとれなかったのもあろう。

私は今述べた様な二つの方式の中で前の方を全体的方式とし、後者を個別的方式として取扱うつもりである。前者は多分に政策との関係に於いてとらえられ、後者は理論体系を構成する諸要素として考察されよう。此の場合、理論体系の歴

史的制約と云うことと、理論構成上に於ける先入主とは共存しているのである。前の節で述べた様な問題適合性には政策的意識があると当然考えられるのであるけれども、それによって理論の科学性が失われるとは決して考えていない。元々、社会科学の、殊に経済学の歴史的普遍性を否定する立場に立てば、政策的ヴィジョンをもっていたとしても、充分に科学的たり得るのである。否むしろ、その様なヴィジョンは必ず存在すると考えるのである。

扱て、問題を元に戻して、スタークに於ける全体的方式と個別的な方式について述べよう。

既に述べて来た様に、彼は経済学の定義を「歴史的に見れば、経済学とは近代交換経済に於いて支配的な秩序の討究と分析をなすことである」と述べている。^(註1)そこには政策はない。又、政策家と思想家との区別を厳にすべきことを強調している。だから、理論的にのみ理論の形成とそれに対する現実のみを取上げ様としている。併し、重商主義に於いて金の必要性が取上げられたこと、又、その為に貿易差額が強調されたことは理論的に正しなかったにしても、それは同時に政策的要求又は意思を含んでいる。ケネーが當時にフランスに於いて農業のみの生産性を主張する場合、理論的にも正しいし、同時に自由経済、政府の干渉排除の要求を含むのである。又、リストの発展段階説は極端に云うならば保護貿易政策の為の理論的装備と考えられるのである。随って、政策的問題を全面的に切り離してしまうことは出来ない。之はスタークの方式に従えば当然にそうなるのであって、彼自身それを否定してもそれは駄目である。此の場合注意すべきは、問題を取上げる意識、即ち、問題意識である。此の問題意識こそ、経済学の政策的構造を裏付けるものであろう。理論と政策との分離とは云うことは、政策と云う言葉の意味のとり様で正しくあり、正しくもなくなる。併し、少くとも、歴史学派に到るまでの各学派の根底には常に生産力の発展と云う目的が確実に存在したのであって、その政策的意思を無視して、それ

らを論ずることは出来ないであらう。

扱て、今回までの要点、特に政策性との關係の強い点を簡単にふり返つて見よう。

重商主義の根底に流れるものは自然經濟から交換經濟への推移と云う事實である。此の為の經濟政策としての、金銀其他の貴金屬の重視であり、その獲得の為の外國貿易、國家の干涉、商工業の重視である。特に生産の拡大と交換手段の増加との比例關係等は近代理論に於いても証明せられている合理的なものである。此の交換經濟は直ちに私有財産を基とする資本主義經濟に向うのであるが、私企業自体が未だ獨立して自由に利潤をあげ得る段階でなく、政府との結合關係に於いて独占的利潤を蓄積するのである。利潤の見透しなしには生産は行われ得ないし、まして生産の増大などあり得ない。従つて、政府によって保証された利潤があつたこそ生産が行い得たのである。又、その為には貨幣量の増大は全く必要な條件なのである。右の様な事情は問題ないのであるが、ゾムバルトの云ふ様に初期資本主義の經濟學として把えることが此の際必要である。つまり、資本主義と云う生産力發展の機構、即ち、生産力發展と云う機能をその本分とする機構に關連させて考えることが大切である。故に資本主義への移行の為の準備段階として考えられる。

次に、重農主義にあつては、スターク流に云えば、フランスと云う大農業國に於ける當時の經濟機構の不均衡を是正して、資本主義經濟の成立の為の準備を一層確實にしたのである。ただ、自然的秩序と云う表現が物語る様に、自由經濟を神の秩序があるかの如く考える点が間違つてゐるのである。經濟發展の段階にあつては、自由が望ましい場合もあるが、統制の必要な段階もあることは敢てリストを引合ひに出す必要もない程明白な事實である。重農主義も資本主義經濟成立の為の準備段階となると、次の古典派の時代は資本主義がいよいよ軌道にのり出した段階である。スミスが産業革命以前

のマヌファクチャーの段階に於ける学者であることは言う迄もないが、リカルド以後は資本主義の発展と歩調を合せている。古典学派以後の説明は不充分なので、此処で資本主義と經濟政策との関連については余り論じ得ないが、スタークに従って見ても、古典派と歴史学派との相違は資本主義の発展の相違として見られる。ドイツに於いては封建的な諸要素を多分にのこしていたので、歴史学派の発生を見る重要な条件があったのである。社会政策的要素の問題は別として、リストにあつてはイギリス的な展開を旨としたのである。(リストを歴史学派の代表とすることは必ずしも正しくはないかも知れないが)、即ち、彼の云う農工商状態とはイギリスの様な資本主義的条件の完備した状態を云うのであつて、之こそ最も生産力発展に最も適合せる状態なのであつたのである。

私は前に資本主義を生産力発展の機構として把える様に述べた。資本主義が今日の如く批判や非難の対象となつた時代に資本主義の効能を述べ立てることはどうかと思われるかも知れないが、別に異を称えるつもりはない。資本主義の歴史的機能のことを云っているのである。勿論マルクスを始め、資本主義が人類の生産力に与えた事実はいやしくも經濟に少しでも理解をもつ人は良く理解している。問題は今日の資本主義と生産力との關係である。話が他に外れる傾向があるが御容赦を願う次第である。私は先に述べた通り、資本主義の本質をシュンペーターの云う様に新結合、革新の過程であると理解する。^(註2)此の作用のない処に資本主義の存在意義がないし、その作用が一九三〇年代に見られなくなつたので、シュンペーターも社会主義への行進を論ずる様になつたのである。(尤も彼の場合には、彼の「經濟発展の理論」の現実適合性が薄くなつたので、本質的に資本主義でないものと見る様になつたと思われる。彼は元来社会主義に好意を持たない人である。)つまり、競争と云う促進力によって新しい投資の強行を余儀なくされる過程なのである。此の新投資が充分に行わ

れ得ない処に資本主義の危機があるので、第一次大戦後の大恐慌以後に於ける諸問題の原因となつたのであるが、生産力發展の作用を営めば存在理由は未だ残存する。第二次大戦後の資本主義諸国は益々矛盾を強化したと云われ、恐慌が直ちに發生するかの様に云われて来ており、恐慌が發生しないのは戦争、乃至軍事化政策によるものだと言ふ様に云われて来た。併し、顧みて見ると、元来矛盾のない経済と云うものを近代社会に於いて考えるのがおかしいのである。資本主義には矛盾が始めからつきまとつていたのであり、此の矛盾が發展に役立つ要素でもあるので、第二次大戦後の米国の経済的發展にやれ矛盾の強化だ、恐慌の即時發生だと考えるのは資本主義の全過程を見ない見解である。目下の米国始め諸資本主義国の活況は第二次産業革命とも云えるオートメーションによる設備更新を起動力としているもので、その結果、失業が生ずるからいけないと考える様であるならば、第二次ラディカル運動でも考えれば宜しい。

問題は、此の革新を通じて経済的發展をなさしめる作用が停止する様になることである。又、その發展に伴う犠牲をどの様に償うかにある。發展の要素が失われた場合、資本主義は存在理由を失うのであるから自から変貌するであろう。此の場合労働階級の役割が重要であることは云うまでもないが、社会主義への途は暴力革命ばかりでないことは最近の世界の勢が示している。又、發展の犠牲については一定のバランスが考えらるべきで、之は資本主義国に限らない。急速な工業化が如何に国民に犠牲を強制するかは最近のポーランドやハンガリーの動乱が証明するであろう。ただ、米国に於ける如く、労働階級の地位の向上が国内市場の拡大となつて、経済に対する安定的要素となつてゐる事も忘れてはならないであろう。社会主義も資本主義も公式通りに存在するものと考えすることは抽象的には出来るが、現実には純粋の資本主義などと云うものは考えることが出来ないであろう。併し、資本主義が独占段階になるとその本来の使命が十分に尽

せなくなる傾向があることは充分に認めるのである。ただ、それだけで直ちにその發展的機能がなくなってしまったと考えることは出来ない。独占的競争も、不完全競争も存在するのであるし、シュンペーターの云う様に新結合は一時的独占を求めて行われると云う事実もあるのである。^(註3)資本主義は歴史的存在なのであるから、歴史的に理解する必要があると云う判り切った事を此処で改めて云うのである。

話を中心題目から外れた様であるが、此の様な発展を通じて、各学説を理解した上で、始めて政策性が出て来ると思うのである。

(註1) 「政経論叢」二十二巻 第五・六号 九七頁 参照。

(註2) 此の点についても拙稿「シュンペーターの社会主義への行進とトラスト化資本主義について」 政経論叢 第二十巻 第五号 参照。

(註3) 同 右

(三)

スタークは古典派については、スミスの予定調和論、価値論、カリルドの価値論、資本理論、地代論、賃銀論、マルクスの価値論について解説している。マルクスについては彼を古典派の処で論ずるには異論が生ずるであろうが、理論的には古典派の後継者と見ているので、彼の流儀に従おう。

スミスの予定調和論についてはラッサールの批判と対比させて、十八世紀と十九世紀の社会・経済的相違をあげて、十八世紀は社会が最も平等に近かった。即ち、産業革命によって、資本が生産の中心になる以前のマヌファクチャーの時代

には独立生産者になる事が容易であり、且つそれによつて経済的成功の可能であつた事を示して、此の様な時代には競争と云う条件があれば経済的自由は社会の調和に導くと考えても間違いない事を示したのである。此の予定調和論は自由経済の根底に横たわる觀念であつて、スミスの自由経済の主張が当時の経済の現実に立却せるものであることを主張するのである。同時に自由が経済の発展の条件であることは云うまでもないのである。それではスタークが十八世紀に於ける予定調和論の合理性を述べ同時に産業革命後の十九世紀にはその存在の基盤が失われたとする場合、十九世紀の経済は自由の方が宜しいのか、統制が宜しいのかについては直接答えを与えていない。ただ現実に十九世紀には自由が支配的であつたことを述べると共に、一方では社会主義が主張されたことを記しているだけである。産業革命後にスミスの様な考え方の基盤が失われれば、自由によつて被害を受ける立場からは社会主義への要求が出され、自由によつて被害を受ける事を充分観察した保守派が社会政策を称え、又その様な自由によつて生ずる問題に直接ふれる事をせず、生産の自由は失われたが消費の自由が存在すると云うので、此の残された消費の自由を分析の出発点として取上げる学派が出たことが論理的に判るのである。いずれにせよ、スタークは予定調和論の存在合理性を示したのであるからスミスの自由経済が生産力を発展させ、諸国民の富を増大させると云う考え方を歴史的に肯定したのである。スミスの価値論の説明では、スミスが労働価値説と生産費説乃至は労働不効用説とを主張し乍ら結局は労働価値説にウェイトを置いたことを述べている。そして、同時の資本が今日のキャピタルでなく、ストックと云う言葉で表現される様に、労働と労働手段との分離の行われていなかったマヌファクチャーの時代に於いては生産せられた生産手段は労働者の所有に属しており、従つて、今日考えられる様に資本の地位が決定的なものでなかつたから、労働(と土地)を決定的な生産要素を見做したのであるとしている。

だから、資本の蓄積よりも、分業の方が生産力発展の本質的要素だったのである。故に労働価値説は此の場合、労働力の利用が効果的に行われなければ生産力発展が充分行われ得ないことを示しているのである。

リカードとなると事実が異つて来る。元来リカードの「経済学原理」をマルサスとの論争の結果生じたものであると云うのが一般的見解なのであるから、リカードが生産力発展の因子を何処に見たかによって事態が異つて来るのである。リカードは周知の様に資本の蓄積に生産力発展のカギを見ている。産業革命の偉大なる進行によって生産力が如実に増大しているのを見た彼としては、その過程が投資の連続の過程であることを充分認識したのに違いない。資本はいくらあつても足りない程なのである。此の資本の蓄積を容易にするものは産業利潤を大にすることなのである。故に此の利潤を損う要因を除去することこそ生産力発展の為に必要な要件であつたのである。併し、此の様に重大な資本に対して彼は特別な地位を与へはしなかつた。否、彼は資本と労働とを同質的なものと見做したのである。

此の態度は対地主關係に於いて、資本家と労働者の共同戦線を示すものとしては極めて面白いのであるが、資本と労働との分離が明白化した場合には、彼はその価値論の修正を余議なくされるのである。併し、労働と資本を同質的なものと見て地主との戦いには労働価値説を主張した彼も一方では賃銀鉄則と賃銀基金説を主張している。賃銀を決定する要素は労働の再生産費とされて、価値の分前には強力な権利を得ていない。生産に参加する様式が分配を規制するのではなく、別個の法則によって賃銀は決定されるのである。故に創造せられた価値の分配に強力な要求をなし得る地位にあるのは資本家と地主なのである。地主の分前を減少せしめる為に労働価値説は必要なのであり、然も、労働賃銀は生活資料に限定されるのであるから、利潤の増大は地代の下落を必要条件とするのである。従つて、労働価値説と云つても、スミス

にあつては労働の生産力の増大が社会の総生産力の増大であつたのであるが、リカードにあつては労働価値説は対地主關係で地代を引下げて、利潤の増大を經過して、投資の増大により生産力増大へと進むのである。リカードは労働価値説を称えても、賃銀鉄則を忘れなかつたのである。労働と資本を現実の労働と蓄積された労働として同質的なものとすることは、両者の相反關係を如実に示すものである。高利潤は低賃銀を意味し、高賃銀は低利潤を結集する。而して、賃銀そのものは生活資料の価値によつて決定されると云うのであるから、食糧の価格の高低に左右される。地主と資本家との対立關係にリカードが産業資本家を代表し、マルサスが地主の代弁をなしていると云う周知の關係である。併し、両者の見解の基礎は大して相違していなかつた。マルサスは資本主義の進行に伴うマイナスの面に着眼し、リカードは發展を通じて、そのマイナス面をカバーする繁榮を考へていたのである。その為には穀物の自由輸入が必要であつたのである。自由貿易が低穀価、そして低賃銀による高利潤そして投資の増大によつて經濟も繁榮し、雇傭も増大すると云うのが彼の基本線である。そして、彼の理論は或る意味ではスミスよりの繼承であるから、労働を資本の對抗關係は理論的には存在していたが、それは未だ問題の中心的とはなつていなかつたので、専ら發展の要素にのみ注意を集中していたのである。彼の經濟學が分配關係の究明を目的としていると云うのも、つまるところ、分配關係に於ける地代の地位を明らかにする事が題目で、單に分配の問題に専心していなかつた事は、労働階級に対する特別の配慮がなされていないことによつても明らかである。資本主義が既に不況とか失業とかの問題を生ぜしめてはいたが、發展の要素に満ちていた時代には、その發展を阻害する要素を除去しようとする態度が正しいのである。マルサスはその「經濟學の諸原理」の最後の章で「富の増進の諸原因」について論じたとしても、當時にあつて、何が富の増進の最大の要因であるかと云う事を認識し得なかつたので、

リカードに名をなさしめたのである。又、マルサスが、最近、ケインズ其他の人々によつて再評價されている原因は、リカードが長期的に觀察して個々の不況とか失業と云う問題を余り深く取り上げないのに対し、マルサスは之等の問題を取上げて、社会進歩を論じた処にあるのであらう。何故ならば、真の意味の古典派は發展期の經濟学であるのに対し、マルサスが高く評價されたのは資本主義の發展が一段落して進歩と云う問題よりも、安定と云う問題に社会が注目している時代に於いてなされているからである。

併し、リカードは、「經濟学原理」の三版（一八二二年）に於いて、価値論を修正している。之はスタークの云う様に機械化の進行に伴う現実に対応しなくなった事実を認めねばならなくなったからである。即ち、機械と労働との結合の比率が全産業部門に於いて同一であると言ふ仮定は既に非現実的なものとなつたからである。同時にそれは資本と労働との対立關係が顕然化した徴候なのである。リカードはそれまで機械の採用はその國民經濟の純収益を増加せしめるから、それに相應して労働階級の所得も増大すると考えていたのであるが、価値論の修正を行つた時には、機械の使用が労働階級に必ずしも有利な結果をもたらさず、労働階級に失業の恐怖が襲来して來たことを示しているのである。而して、リカードが結局は差額地代の上昇による利潤率の一般的低下を予想したのは労働価値説をとる限り、論理的必然のことであつたのである。又、労働価値説はその根底に人間中心主義を置くのであるから、資本の支配する資本主義秩序に反対する必然性をもつのは当然であり、マルクスが革命の見地からリカードの労働価値説を修正して取上げたのは当然であらう。そして、当時の經濟發展の担当者たる資本家階級には生産費説が向く様になつたのである。従つて、スミスに於ける労働価値説は労働の生産力の増大がその儘社会的生産力の増大を意味し、リカードに於ける労働価値説は利潤の増大を通じての生

産力の増大を意味し、マルクスに於いては労働価値説は資本主義社会の打倒を意味するのである。まことはスタークの云う様に、変遷の時代には永継する価値の理論は創造し得ないのである。

スタークのなしている、リカードの地代論と賃銀論問題はそのまま当時の現実に立脚せる立派な説明として認められる。ただリカードの差額地代論が地主の所得と資本家の所得との対立の説明に於いて、如何なる役割を果していたかを忘れてはならないであろう。リカードの面目が一番発揮されるのは地代論をも含めた理論的裝備をもって利潤の増大による生産力発展を主張する点と、当時の英国の現実に相応した比較生産費説を理論的裝備とする自由貿易論である、彼はまことに当時の英国に於ける発展的要素を鋭い智力をもって認識した人であった。同時に、その現実急速に変化していたのである。スミスもリカードも強く発展を希望し、その為に何が問題であるかを認識してそれに焦点を集めて論理を展開したのである。その様に生産力の発展と云う政策目的をはっきりと前提した理論であると云う点に問題を限定して此処までスミスとリカードについて述べて来たのである、故にその様な政策性の強い理論にしても問題適合性と云う点では十分に資格をもっている。政策性の強いことは客観性に欠くる処が多いと考える人も多いであろうが、元来経済学の理論は常に一定の前提の上に立つて展開されるのであるから、常に理論の妥当性には限界が存在するのである。スタークの云う様に人間の考え方が変れば経済学の前提も変らざるを得ないのである。近代の純粹理論と雖も消費選択の自由と云う前提に立つ理論である限り一定の妥当性の限界を有するのである。スタークは前稿に於いて紹介した様に「人間は何物をも永久に持続し得ぬのであって、経済学は社会に関する学問であり、社会の変化と共に変化すべきものである。」と述べて、経済学が経済生活の中で、おのずから科学的経済学の対象となるべくして発生した事象を分析するものであり、その限りでは科学

は絶対的のものにはなり得ないが、併し、常にその進歩の過程において、人類の福祉に貢献しているものであることを記している。この考え方に従って、問題適合性は経済学に於ける重要な要件であり、その意味ではスミスもリカードもその時代の問題を良く認識し分析して経済学の発展に貢献したのである。つまり問題の本質を経済全般の中から認識し説明したのであり、個別的でなく全体的な認識の上に立ってその問題解決の方向を導き出したのである。その意味で十分に科学的であつたのであり、同時にその見出した諸法則の有効性に限界があつたのである。

それではマルクスに移ろう。スタークはマルクスが古典派から出ると共に古典派と同じ理論的困難に直面した点を強調すると共に、J・S・ミルの「経済学原理」から長文の引用をして搾取と云う問題についても共通の問題であつたことを示している。即ち、ミルの『利潤の原因は労働がそれを維持するに必要なもの以上のものを作り出すことである。……』

もしその国の労働者が全体的にその賃銀の二〇%余分に生産するならば、利潤は二〇%になるだろう』と云う言葉を引用

(註1)

してマルクスの剰余価値が古典派学説の中心と深い関係にあることを示している。更にスタークはマルクスの労働価値説の論理的矛盾、即ちマルクスの利潤率均等の問題を取上げて『交換関係の形成を窮極的に決定するものは価値と剰余価値ではなく、生産費と平均利潤である。換言すれば、その生産に費された労働時間によって決定されるその価値よりも或る物は高く或る物は低く交換される。……価値と価格は一致しないことになる。』そして、費用価格と平均利潤を加えた

ものが生産物の価格になり、利潤の平等化が資本家階級の内部で発生せず市場に於いて生ずる。即ち全消費者の参加によつて生ずる、と云うのでは労働価値説は主張し得ないとしている。^(註2)従つて、スタークによればマルクスの価値論はスミスの価値論の発展ではあるが、スミスの時代には正しくともマルクスの時代には正しくないと結び、マルクスの第三巻の説

明は生産費説であると思倣しており、マルクスの値打を歴史的方法に見出している。併し乍ら、マルクスが古典学派から理論を發展させたと言うだけでは問題にならない。スタークの言う様にマルクスの価値論に於ける資本論の第一巻と第三巻の矛盾と云う点は既に多くの人々によって論ぜられ、弁証法的立場と形式論理的な立場の相違であると云う様にも云われている。又、ハイマンの云う様にマルクスにとっては労働価値説がその主張の根底をなすものでなく、大規模生産へ向う趨勢の学説こそが実はその中心であると言う考えもある。此の場合は生産及び富の集中とそれに伴うプロレタリアートの勃興が理論の中心になるのである。それを土台にして革命的な政治的プログラムに發展すると云うのである。マルクスの理論に於いて、経済学に関する限り理論的一貫性については形式論理的に矛盾がある事は認めざるを得ない事実である。之を弁証法的に理解する事は容易ではない。つまり経済学が大きな政治目的の手段の一部として存在し、その為の理論的装備の一部となっているからである。併し乍ら、それだけではマルクス経済学の真価は判らないであろう。マルクスの見た社会は資本主義の發展に伴う景氣巡環が行われ、發展に伴う犠牲が累積的に増大して、資本主義の生産力發展機能がリカードの時代程表面的なものになつた社会である。生産の集中傾向と失業者の増大、生産力發展速度の鈍化と云う事実を前提して、その生産力を真に増大せしめるものは既に自由なる経済ではなく、社会主義の計画経済であると見たのである。彼のヴィジョンは或る意味で正しく、或る意味では間違っていた。正しいと云うのは、資本主義の根底をなす私有財産制は存続しているが、資本主義のワク内でも計画化が進行しているからである。間違っていたと云うのは、資本主義そのものが現在まで先進諸国の大部分に存続していることである。彼は資本主義の弊害の面に注意を集中しすぎて、資本主義の生産力についての認識を誤まつたのである。勿論、今日の資本主義国の存続について植民地の搾取にその原因が

あるとする説があるだろう。併し、資本主義の成立には始めから未開発諸国に対する搾取があつたのである。植民地的な搾取は新しい現象ではない。重商主義時代の方が不平等交換貿易によって利する処が多かつたであろう。従つて、資本主義が今にも崩壊すると云う様な考え方は資本主義に対する認識を誤つたと見るべきである。歴史的に判断すれば、資本主義の發展的機能が一段落した段階に、その犠牲者の立場から見た綜合的学説なのである。そして、進歩に対する妨害因子を仮定し、それを除去すること。即ち、資本主義的生産様式の排除と、社会主義方式の樹立により進歩を考えたのである。労働価値説が平等主義的な社会をその存立の前提としていることはスミスの所で述べた。リカードの労働価値説は論理的に利潤と労資の対立を示するのである。故にマルクスの様な考え方の人が労働価値説を理論的前提とするのは当然である。彼の労働価値説はそれから論理的に彼の結論が導出されたのではなく、彼の結論の為に設けられた前提なのである。併し、彼の経済学に対する貢献は偉大である。生産集中の理論、恐慌の理論等を始め幾多の今日問題になつてゐる理論の先鞭をつけてゐる。マルクスの立場に反対する人々も彼の取上げた問題とそれに対する貢献は否定し得ないであろう。マルクスは過去の歴史的存在とすればする程彼の科学性が明らかにになるのであらう。即ち、T・R・マルサスは進歩に対する妨害的要因を強く打出して、進歩に対する条件限定をなしたのであるか、進歩の速度に押されてそれ程強い影響をもち得なかつた。而るに、マルクスの資本主義的進歩に対する否定を条件限定と云う見地で考えれば一八四〇年代の現実からあの様な偉大な理論を創出した彼の科学性を認ざるを得ないであらう。そして、前期歴史学派を先進英国より一步遅れた国の理論として見れば、マルクスの理論がそれより更に一步遅れた国に多くの同情者を見出すのは当然であらう。その場合歴史学派は資本主義的条件で生産力の発展を考えたのに対し、それより更に遅れた国々が非資本主義的な条件で発展を考

えるのはまことに合理的である。元来、後進国には当然に独占的傾向が存在するものであるが、それが国家的独占到まで到るのはそれだけ後進性が強い事の証明である。マルクスの理論は資本主義の発展的機能を信頼していない学説であるから、先進国との競争に絶望的な国には充分受入れられる要素をもつのである。マルクスの理論は理論的精密性には歴史的制約の為に幾多の難点をもっているが、彼の問題意識の鋭さは依然として今日に於いても生きている。資本主義は幾多の欠点を露呈してはいるが今日まで残存している。社会主義の問題は彼一人の専有財産ではないし、社会主義の存在様式も種々ある。併し、資本主義そのものの批判者としては第一人者として歴史に永久に残るであろう。逆説的に資本主義は或る意味では彼の批判があつたから今日まで残存しているとも云い得るのである。そして彼の理論的命題の中に今日有用なものが数多く存在している。マルクスを批判する側に於いてもその批判者の理論が絶対的に正しいと云えないとするスタークの立場に立てば、過去の業積として充分尊重せねばならぬであろう。マルクスの共産党宣言が一八四八年であつたことを思えば、マルクスの理論的不備を攻撃するより、その成果に於いて判断する方が正しいであろう。そして、マルクスが今日存在するとせば、決して公式通りの理論を継承する様なことはないであろう。

スタークは歴史学派に対しては、専らその後進性から説明する。特に歴史学派の倫理的態度を当時のドイツの封建性の強さから説いている。つまり個人主義的人間像から出発することが出来なかつたのである。此の考え方は近代の経済学説が総て合理的人間を前提しているのに対し重大なる警告をなすものである。近代経済学説が原子的な個人主義社会を前提している事実に対し、その様な社会は歴史的な一段階に過ぎぬ事を示そうとするものである。スタークの、ロビンソンクルーソーは全く孤立せる人間像でなく、近代社会の人間が偶々孤立したにすぎないと云う言葉を顧みれば、ドイツ

歴史学派の方法も理解されると共に經濟理論の歴史的制約性が認識されるのである。又、産業革命の進行のモデルを英国に見ることが出来たドイツでは、自由が調和を招来するものでないことを認識出来たのであるから、干渉主義が多く存在しても決して不思議ではないのである。故に前期の歴史学派は資本主義的軌道にのせて生産力の発達を考え、後期歴史学派は資本主義の自由なる運行よりも国家の干渉を強く要求したのである。後にドイツに国家資本主義が勢力を占めたのは偶然ではないのである。

歴史学派は政策と歴史が主で理論が従であつた。此の様な場合には政策的背景を余り深く論ずる必要はないであらう。ただ、スタークの述べる様に、オーストリーに於ける商業資本主義的經濟の發展による新しい理論の発生は歴史学派の存在を覆したのである。歴史学派の中で、リストが今日でも活々としているのは生産力の問題に視点が集中されていたからで、發展の時代には生産力を考えた理論が常に科学性をもつのである。

以上の説明で明らかな様に、スミスにせよ、リカードにせよ、リストにせよ、之等の人々は皆生産力の發展の問題に取組んでいた人々である。マルクスと雖も、社会主義による生産力の増大を考えていた。併し、資本主義の進行は生産部門に於ける資本の地位を決定的に重要なものとし、生産手段を所有せぬ人には生産の自由は存在しなくなった。同時に景気の循環は資本主義についての樂觀的要素をとってしまった。マルクスは資本の集中を予言したが、未だ今日に見られる程の集中が行われず、最も個人主義的にして、企業者が利子依食者になっていない時代である一八七〇年代に新しい經濟理論が出て来たのである。その特色は發展と云う要求を理論体系内にもたない事である。資本主義の發展が正に一段落し、所謂相対的安定の時代がその時代であつた。

(註1) J. S. Mill, Principles, ed. Ashley. p. 416 sq.

(註2) Stark, The History of Economics. p. 47.

以下は次回に論ずることになったが、今後は執筆の回数が増えた為に余り時間的間隔を要しないであろう。